In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	異性愛者は同性愛者をどのようにみているか：社会的アイデンティティ理論と帰属理論の観点から
Author	鈴木 文子, 池上 知子
Citation	都市文化研究. 20 巻, p.68-80.
Issue Date	2018-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科 ： 都市文化研究センター
Description	研究ノート
DOI	10.24544/ocu.20180402-007

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 20，68–80頁，2018

◇研究ノート◇

異性愛者は同性愛者をどのようにみているか

—— 社会的アイデンティティ理論と帰属理論の観点から ——[1)]

鈴木　文子・池上　知子

◆要　旨

これまでの研究において，男性異性愛者はゲイに対して否定的態度を示すことでゲイとの差異化を図りジェンダー自尊心を維持すると考えられている。一方，女性異性愛者はレズビアンに寛容な態度を示すことでジェンダー自尊心を維持することが示唆されている。さらに，ジェンダー自尊心と同性愛者への態度との関係が同性愛者に関する生物学的情報によって影響されることが示されているが，その影響過程が男性異性愛者と女性異性愛者とでは異なることが見出されている。本研究では，同性愛者に関する生物学的な情報がどのような認識を促すのか，さらに，生物学的情報によって顕現化した同性愛者に対する認識が，ジェンダー自尊心による心理機制に与える影響について検討を行った。仮説は次の通りである。男性異性愛者の場合，同性愛者と異性愛者の生物学的相違に関する情報は両者の弁別性を高め，その結果，ジェンダー自尊心が同性愛者への否定的態度を強めるという関係が弱まる。女性異性愛者の場合は，生物学的相違に関する情報は同性愛者の性指向が生得的なもので統制不可能であるという認識を促し，その結果，ジェンダー自尊心が同性愛者への肯定的態度を強めるという関係がさらに強化される。日本の大学生 175 名を対象とする質問紙実験を実施した。仮説は支持されず，男性異性愛者と女性異性愛者のいずれにおいても，同性愛者と異性愛者の生物学的相違が知覚されても，それが集団間の弁別性や性指向の生得性及び統制不可能性の認識には影響を及ぼさなかった。ただ，予想外ではあったが，女性異性愛者においては，同性愛者の性指向の統制可能性をより高く認知している場合にジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対する心理的親しみが増し，同性愛者の性指向の生得性の認識が低い場合にジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対する同情を示すという傾向が見出された。このような傾向は，男性異性愛者には認められていない。本研究の結果は，男性異性愛者と女性異性愛者では，同性愛者に対する見方に基本的な違いがあり，それゆえにジェンダー自尊心による同性愛者への態度が規定される心理機制にも違いが生ずることを示唆している。

キーワード：ゲイ，レズビアン，統制可能性，ジェンダー自尊心，偏見

（2017 年 9 月 1 日論文受付，2017 年 11 月 10 日採録決定 『都市文化研究』編集委員会）

同性愛者に対する態度の規定因についてはこれまでに様々な議論がなされている。その中でも，多くの研究で男性は女性よりも同性愛者に否定的であること，とりわけ，男性の男性同性愛者に対する態度がもっとも否定的になりやすいことが比較的頑健に示されている（Hoover & Fishbein, 1999; Herek, 2002）。また，このような性差の背景に，男性異性愛者と女性異性愛者では同性愛者に対する態度において異なる心的メカニズムが存在している可能性がこれまでに示唆されている。

本研究では，異性愛者の同性愛者に対する態度の性差に注目し，これまでに議論されている男性異性愛者と女性異性愛者それぞれの心理機制が妥当であるのか検討を行うこととした。

社会的アイデンティティ理論による心理機制

Herek（1993）は，男性の場合，ゲイ[2)]に対して否定的態度を示すことは自分が異性愛者であることの証明になると指摘している。そして，伝統的な性役割規範を重

んじる社会では，女性より男性の方が異性愛者であることがより重要であり，男性は他者からの是認を得るために，異性愛者であることも含めた自身の性別アイデンティティを強調し，同性愛者に対して否定的な態度を示すと論じている。

このような Herek（1993）の主張は，社会的アイデンティティ理論（Tajfel & Turner, 1986）による説明と一貫したものである。社会的アイデンティティ理論では，自身が所属する集団を自己の一部とみなす，すなわち，集団成員性を自己の属性の 1 つとして認識する過程に着目する。社会的アイデンティティ理論によると，人は集団に所属することで肯定的な自己概念を形成し，自尊心を維持するとされている。その際，集団間の比較が重要となり，人は自分が所属する集団（内集団）が他の集団（外集団）にはない優れた特徴をもつことを確認しようと動機づけられるようになる。さらに，外集団と内集団の区別が曖昧な場合には，外集団に否定的態度を示すことで内集団との弁別を図ろうとする（Branscombe, Ellemers, Spears, & Doosje, 1999）。

こうした社会的アイデンティティ理論に基づき同性愛者への態度について実証的な検討を行っている研究として，Falomir-Pichastor & Mugny（2009）の研究があげられる。Falomir-Pichastor & Mugny（2009）は，男性異性愛者のゲイに対する態度に上記の考えを適用している。つまり，男性異性愛者がゲイに対して否定的態度を示すのは，同じ男性でありながら性指向が同性愛である彼ら（外集団）と自分たち（内集団）との差異を明確にし，異性愛者であることが前提とされる“男性”集団の成員であることから得られる自信や誇りといった肯定的な自己概念を維持するためだと考えたのである。ここでの，男性としての自信や誇りといった性別に基づく肯定的な自己概念は「ジェンダー自尊心」と称されている。

Falomir-Pichastor & Mugny（2009）の研究では，男性異性愛者はジェンダー自尊心が高いほど同性愛者に対して否定的であることが示されている。女性異性愛者については，このような関係性は見出されていない。さらに，実験者が同性愛者と異性愛者は遺伝子などの生物学的な次元で異なっているという情報を与えると，男性異性愛者にみられたジェンダー自尊心と否定的態度との関係が緩和することが見出されている。これは，男性異性愛者と同性愛者の客観的な差異が明示されることによって，ジェンダー自尊心を維持するために否定的態度を示す必要性が低減したからだと考えられる。これより，彼らは，男性異性愛者がゲイに対して否定的態度を示すのは，ゲイと自分たちとの差異を明確にし，自身のジェンダー自尊心を維持するためであると結論している。

鈴木・池上（2015a）は，Falomir-Pichastor & Mugny（2009）の知見が，日本の大学生を対象とした場合も再現されるか検討を行っている。その結果，日本の大学生を対象とした場合においても男性異性愛者のゲイに対する態度については，ジェンダー自尊心の維持防衛をはかる心理機制による解釈が可能な結果が示された。

具体的には，男性異性愛者の場合，同性愛者と異性愛者が生物学的に同じであるといった情報が与えられると，ジェンダー自尊心が高いほどゲイに対して否定的態度を示すといった関係がみられた。これは Falomir-Pichastor & Mugny（2009）の知見と厳密な意味において合致する結果ではない。しかし，ゲイとの集団間の境界が曖昧であることが強調された場合に，集団間の差異を明確にしようと否定的態度を示すことで男性異性愛者としてのジェンダー自尊心を維持していたと考えれば，彼らの主張と矛盾はしていない。

しかしながら，同性愛者のサブタイプ（例えば，男性的ゲイと女性的ゲイ）を設けてジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度について検討した鈴木・池上（2015b）においては，男性異性愛者のジェンダー自尊心とゲイに対する態度の明確な関係は示されていない。ただし，同性愛者と異性愛者が生物学的には同じであると明示された場合に，女性的なゲイよりも男性的なゲイに対する好感度が低くなる傾向が認められている。男性的ゲイは，男性異性愛者との弁別性を曖昧にする存在だからかもしれない。これらの結果は，上述したジェンダー自尊心の維持防衛のための心理機制が必ずしも頑健なものではないことを示唆しているが，男性異性愛者はゲイとの集団間の弁別性が曖昧な状況では否定的態度を強めるといった関係はみられており，男性異性愛者のゲイに対する態度においては社会的アイデンティティ理論による心理機制が大きく関わっていることが考えられる。

帰属理論による心理機制

Falomir-Pichastor & Mugny（2009）や鈴木・池上（2015a）の結果から，男性異性愛者のゲイに対する態度においては社会的アイデンティティ理論による説明がある程度は可能であるといえる。他方，女性異性愛者については，Falomir-Pichastor & Mugny（2009）では，ジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度との相関関係が示されなかったことからそれ以上の詳細な検討は行っていない。しかし，女性異性愛者のレズビアンに対する態度について男性異性愛者と同様の検討を行った鈴木・池上（2015a）では，女性異性愛者はジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに寛容である傾向がみられている。この結果について鈴木・池上（2015a）は，レズビアンという社会的マイノリティ集団に対して寛容であることが女性性の中核とされる共同性を発揮することとなり，女性異性愛者のジェンダー自尊心の維持につながってい

るのではないかと考察している。性別に基づく自信や誇りであるジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度の関係は男女によって異なり，男性異性愛者の場合はジェンダー自尊心が否定的態度を強めるが，女性異性愛者の場合は，むしろ肯定的態度を強める可能性がある。

さらに，鈴木・池上（2015a）では，女性異性愛者の場合，同性愛者と異性愛者が生物学的に同じであると伝えられると，ジェンダー自尊心とレズビアンに対する寛容な態度の間にみられた正の関係が弱まることが示唆された。この結果について，鈴木・池上（2015a）は，帰属理論の観点から考察している。帰属理論によると，対象となる集団の持つ特徴が，統制可能であると知覚されるか，統制不可能であると知覚されるかによって，集団に対する態度が異なってくると考えられている（Weiner, Perry, & Magnusson, 1988）。集団のもつ望ましくない特徴が統制不可能であるとみなされれば，集団に対して非難が向けられにくくなるが，統制可能であるとみなされれば，集団への非難は強まる。この帰属理論に則して考えると，実験に使用した生物学的情報は，同性愛という性的指向の統制不可能性または統制可能性の認知に影響したと推察できる。つまり，同性愛者と異性愛者が生物学的に同じであるといった情報は，同性愛であることは生得的ではないという意味で統制可能であり，本人の意志によってレズビアンとしての生き方を選択しているといった認識を促し，寛容な態度を向ける対象ではなくなったといえよう。

本研究の目的

Falomir-Pichastor & Mugny（2009）や鈴木・池上（2015a）の結果から，男性異性愛者のゲイに対する態度においては社会的アイデンティティ理論による心理機制が，女性異性愛者のレズビアンに対する態度においては帰属理論による心理機制が働いていることが示唆される。さらに，それぞれ異なる心理機制が働いているために，同じ生物学的情報であっても，男性異性愛者においては同性愛者と異性愛者の集団間の弁別性の手がかりとなり，女性異性愛者においては同性愛者の性指向の統制可能性の手がかりとして機能していた可能性がある。しかし，生物学的情報を受け取った異性愛者において，同性愛者に関するどのような認識が実際に喚起されていたのかについてはこれまで明確にはなっていない。したがって本研究では，まず第 1 に，生物学的情報によって男性異性愛者と女性異性愛者では同性愛者に関するどのような認識が顕現化されるのかを確認する。そして第 2 に，同性愛者に関する認識がジェンダー自尊心による心理機制にどのような影響を与えているのかを検討する。男性異性愛者と女性異性愛者で異なる認識が促され，それぞれの認識がジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度の関係性に影響を与えているのであれば，これまでの議論が妥当である根拠になりうると考えられる。

以上の議論を踏まえ，以下のように仮説を立てた。男性異性愛者と女性異性愛者では，同性の同性愛者に対する態度がジェンダー自尊心によって規定されるメカニズムが異なっており，そのため生物学的情報の与える影響も異なる。Falomir-Pichastor & Mugny（2009）や鈴木・池上（2015a）の結果から，男性異性愛者はゲイに対して否定的態度を示すことでジェンダー自尊心を維持する。一方，鈴木・池上（2015a）の結果から，女性異性愛者はレズビアンに対して寛容な態度を示すことでジェンダー自尊心を維持する。これらの心理機制の違いから，男性異性愛者の場合，同性愛者の生物学的情報は集団間の弁別性の手がかりとなりジェンダー自尊心による心理機制に影響を与える。弁別性が顕現化すると，ジェンダー自尊心を維持するために否定的態度を強めるという傾向が弱まる。女性異性愛者の場合は，生物学的情報が同性愛者の性指向の統制可能性や生得性の手がかりとなりジェンダー自尊心による心理機制に影響を与える。統制可能性（非生得性）が顕現化すると，ジェンダー自尊心を維持するために寛容な態度を示すという傾向は弱まる。一方で統制不可能性（生得性）が顕現化するとジェンダー自尊心が寛容な態度を促進する傾向が強化される。

なお，宮澤・福富（2008）に示されているように，同性愛者に対する態度は複数の側面から構成されていると考えられる。本研究でも同性愛者に対する態度の下位尺度を設け，同性愛者と友達になれると思うかなどの心理的距離感と，同性愛者の社会的権利を認めるといった社会的容認態度を尋ねることとした。どちらの側面も同性愛者に対する肯定的な態度を示しており，仮説におけるジェンダー自尊心との関係や同性愛者の認識による影響についても同様の傾向が想定される。ただし，雇用場面を用いた実験的研究では，雇用側は同性愛者と思われる人物に対して雇用に関わる差別は行わないが，会話時間が少ないなどの否定的態度を示す事が見出されている（Hebl, Foster, Mannix, & Dovidio, 2002）。このように，公的な態度と個人間の態度が必ずしも一致するとは限らない。現在の日本の社会状況をみると，同性間のパートナーシップを認める自治体が増えつつあり，そうした風潮の中では同性愛者の社会的権利を否認するといった差別的な態度の表出は抑制される可能性がある。したがって，ジェンダー自尊心や同性愛者の認識による影響が社会的容認よりも心理的距離感においてより顕著にみられるかもしれない。さらに，帰属理論の観点からは同情といった側面が重要であると考えられるため，同性愛者をかわいそうに思うかなどについても尋ねることとした。同情は，同性愛が統制不可能であると認識する場合に強まると考え，本研究においては特に女性異性愛者におい

て影響がみられると考えられる。

具体的な予測は以下の通りとなる。

予測 1. 同性愛者と異性愛者は生物学的に異なっているといった情報が提示されると，男性異性愛者においては同性愛者と異性愛者の集団間の弁別性認知の程度が高くなる（予測 1-1）。女性異性愛者においては同性愛の統制不可能性や生得性の認知の程度が高くなる（予測 1-2）。

予測 2. 男性異性愛者は，ジェンダー自尊心が高いほどゲイに否定的態度を示すが，同性愛者との弁別性の認識の程度が高い場合，低い場合と比べてその関係は弱まる（予測 2-1）。女性異性愛者は，ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対して肯定的な態度を示すが，性指向の統制可能性や非生得性の認識の程度が高い場合，低い場合と比べてその関係は弱まる。または統制不可能性や生得性の認識の程度が高い場合，低い場合と比べてその関係が強まる（予測 2-2）。

予測 3. 予測 2 のようなジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度の関連は，態度を構成する諸側面のうち，社会的容認よりも心理的距離感において顕著にみられる。また女性異性愛者については同情においてもみられる。

方法

実験参加者

大学生 175 名（男性 93 名，女性 77 名，不明 5 名）。実験用冊子を 178 名に配布し 175 名の参加協力を得た。

手続き

実験用冊子を用意し，個別に配付し質問紙調査の形式で実施した。2015 年 5 月末〜6 月末の心理学関連の授業終了後に教室に残っていた学生，または大学構内にいた学生や知人に個別に協力を依頼した。質問紙は実験条件（統制条件・相違あり条件・相違なし条件）ごとに作成し，ランダムに配布した。

協力の依頼にあたっては，回答は自由意志に基づくものであることを質問紙の表紙に明記し，口頭でも説明を行った。実験終了後に実施したディブリーフィングでは，研究の真の目的を説明し，回答の際に不快な思いをした可能性について言及し謝罪した。

質問紙の構成

鈴木・池上（2015a）の方法に準じ，以下のように構成した。なお，本研究の目的に照らし，実験操作文である同性愛者と異性愛者の生物学的情報に関する解説文を読んだ後，同性愛者に関する認識について測定する項目を追加した。また，参加者の負担軽減を考慮し，鈴木・池上（2015a）で使用された同性愛者との類似性の知覚に関する項目は削除し，同性愛者に対する態度についても項目数を減らすなどの変更を加えた。

性別　最初に，性別について尋ねた。「男性」「女性」「その他」の選択肢を用意し，どれかに○をつけるよう求めた。「その他」を選択または性別について無回答であった参加者には，ジェンダー自尊心に関する回答は求めず，次の頁へ進むように指示した。

ジェンダー自尊心　Falomir-Pichastor & Mugny (2009) の使用した 3 項目を和訳した。「自分が男性／女性であることを重要に考えている」など，参加者の性別に応じた項目について，“1. 全くそう思わない〜7. 非常にそう思う”の 7 件法により回答を求めた。

生物学的情報の提示　Falomir-Pichastor & Mugny (2009) をもとに鈴木・池上（2015a）が作成した文章を用いた。ただし，文章の趣旨に影響がない程度の修正（文末の「〜生物学的な根拠が証明されています。」を「〜生物学的相違があると言えます。」に変更など）を行った。相違あり条件では，同性愛者と異性愛者では脳の部位や活性化の様子，遺伝子の構造が異なっているといった内容の解説文を提示した。相違なし条件では，同性愛者と異性愛者は脳の部位や活性化の様子，遺伝子の構造は全く同じであるといった内容の解説文を提示した。どちらの文章も架空の内容であった。統制条件では解説文の提示は行わなかった。

同性愛者に関する認識　解説文を読んだ後，同性愛者と異性愛者の生物学的相違に関する 3 項目（「同性愛者と異性愛者は生物学的に異なっている」「脳や染色体の違いによって，同性愛者や異性愛者を判断することができる」「同性愛者や異性愛者であることは，生物学的には区別できない（逆転項目）」），同性愛者と異性愛者の集団間弁別性に関する 3 項目（「同性愛者と異性愛者は根本的な部分で異なっている」「同性愛者と異性愛者は同じ人間だ（逆転項目）」「同性愛者と異性愛者は異なる集団だ」），同性愛の生得性に関する 3 項目（「同性愛は生まれ持った特徴である」「同性愛者になるかどうかは，環境によって決まる（逆転項目）」「同性愛者であることは遺伝子によって決定されている」），同性愛であることの統制可能性に関する 3 項目（「同性愛者になるかどうかは，本人の意志による」「同性愛者であることは本人の選択である」「同性愛者であることは，本人の意志ではどうすることもできない（逆転項目）」）について尋ねた。生物学的相違に関する項目は Falomir-Pichastor & Mugny（2009）を参考に鈴木・池上（2015a）で作成された項目を使用したが，それ以外については本研究の目的に則して独自に作成した。いずれも 7 件法（“1. 全くそう思わない〜7. 非常にそう思う”）により回答を求め

た。統制条件でも他の条件と同様の質問項目に回答を求めた。

同性愛者に対する態度　宮澤・福富（2008）の因子分析結果に基づき，因子負荷量の高さを考慮しながら，「心理的距離」因子から「ゲイ／レズビアンと友達になれる」など 4 項目，「社会的認知」因子から「ゲイ／レズビアンの人権を国がもっと擁護すべきだ」など 4 項目を選択し使用した。さらに「同情」項目として「ゲイ／レズビアンをかわいそうに思う」などの 3 項目を独自に作成し追加した。以上，合計 11 項目について，7 件法（“1. 全くそう思わない〜7. 非常にそう思う”）により回答を求めた。ゲイについての質問項目群とレズビアンについての質問項目群をそれぞれまとめて尋ねることとし，提示順序はカウンターバランスをとった。

個人属性　最後に，参加者の年齢および性指向，性的マイノリティの知り合いの有無について尋ねた。

結果

回収した 175 部のうち，全ての項目に無回答であった 3 名，性別や性指向について無回答であった 4 名，自由記述内容から実験操作に対して疑問を抱いたとみられる 2 名を除外した。さらに本研究の目的に照らし，残り 166 名のうち性指向を「異性愛」と回答した 157 名（平均年齢 19.32 歳，SD＝1.79）を分析対象とした。男性異性愛者 89 名（統制条件 33 名，相違あり条件 28 名，相違なし条件 28 名），女性異性愛者 68 名（統制条件 21 名，相違あり条件 24 名，相違なし条件 23 名）。

尺度構成

ジェンダー自尊心　使用した 3 項目による合成変数を作成し使用した（男性異性愛者：α＝.77, M＝4.88, SD＝1.26，女性異性愛者：α＝.81, M＝4.73, SD＝1.12）。

同性愛者に関する認識　それぞれ関連する項目による合成変数を作成し使用した。生物学的相違（α＝.73, M＝2.87, SD＝1.20），生得性（α＝.54, M＝3.63, SD＝1.10），統制可能性（α＝.66, M＝4.26, SD＝1.20），弁別性（α＝.62, M＝2.44, SD＝0.98）。いずれも得点が高いほど同性愛者に関してそれぞれの認識の程度が強いことを示す。

同性愛者に対する態度　宮澤・福富（2008）や鈴木・池上（2015a）の因子分析結果をもとにゲイに対する態度，レズビアンに対する態度それぞれについて下位尺度「心理的距離」，「社会的容認」を構成し，さらに独自に作成した 3 項目を合成し「同情」尺度とした。ただし，「心理的距離」については，尺度の名称を「心理的親しみ」とし，得点が高いほど同性愛者に対して親和的であることを示すように得点を算出した。各下位尺度の平均値と標準偏差，信頼性係数を以下に示す。

ゲイに対する態度（男性参加者の回答のみ）　心理的親しみ：α＝.91, M＝4.79, SD＝1.29，社会的容認：α＝.88, M＝4.95, SD＝1.19，同情：α＝.73, M＝3.45, SD＝1.12。

レズビアンに対する態度（女性参加者の回答のみ）　心理的親しみ：α＝.91, M＝5.57, SD＝1.03，社会的容認：α＝.90, M＝5.46, SD＝1.03，同情：α＝.50, M＝3.72, SD＝0.83。

仮説の検証

予測 1 について

実験操作文が同性愛者の認識にどのように影響を与えたかについて，生物学的相違，生得性，統制可能性，弁別性を従属変数とし，2（性別：男性・女性）×3（生物学的情報：統制・相違あり・相違なし）による 2 要因分散分析を行った。

生物学的相違については，生物学的情報の主効果のみ有意であった（F(2, 151)＝14.40, p＜.001, η_p^2＝.16）（Figure 1）。多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ，相違あり条件（M＝3.52, SD＝1.20）と統制条件（M＝2.68, SD＝1.09），相違あり条件と相違なし条件（M＝2.41, SD＝1.05）の間にそれぞれ有意確率 0.1%以下の水準で（順に d＝0.73, d＝0.98）有意差が認められ，統制条件と相違なし条件の間には有意差は認められなかった（d＝0.25）。性別×生物学的情報の交互作用は非有意であった（F(2, 151)＝1.01, ns, η_p^2＝.01）。

生得性については，有意傾向ではあるが性別の主効果がみられ（F(1, 151)＝3.54, p＜.10, η_p^2＝.02），女性異性愛者（M＝3.82, SD＝1.02）の方が男性異性愛者（M＝3.49, SD＝1.14）よりも同性愛者の生得性認知得点が高いことが示された（Figure 2）。性別×生物学的情報の交互作用は非有意であった（F(2, 151)＝0.87, ns, η_p^2＝.01）。

統制可能性においても，性別の主効果のみ有意傾向であった（F(1, 149)＝3.15, p＜.10, η_p^2＝.02），男性異性愛者（M＝4.41, SD＝1.21）の方が女性異性愛者（M＝4.05, SD＝1.17）よりも同性愛者の性指向の統制可能性を高く認知していた（Figure 3）。性別×生物学的情報の交互作用は非有意であった（F(2, 149)＝1.81, ns, η_p^2＝.02）。

弁別性については，各主効果および交互作用（F(2, 150)＝0.49, ns, η_p^2＝.01）は非有意であった。

以上の結果から，相違あり条件では他の条件よりも同性愛者と異性愛者の生物学的な相違は明確に認識されていたといえる。ただし，参加者の性別による差はみられなかった。また，女性異性愛者の方が男性異性愛者に比

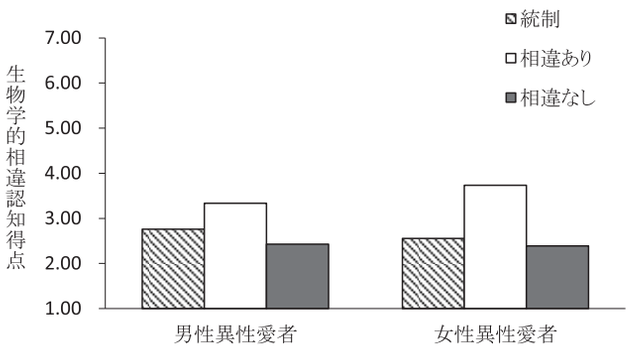

Figure 1. 生物学的相違認知

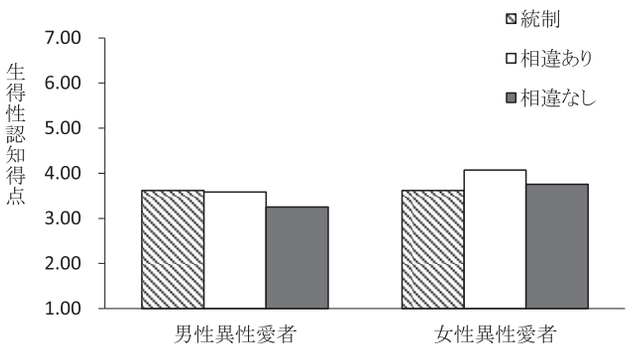

Figure 2. 生得性認知

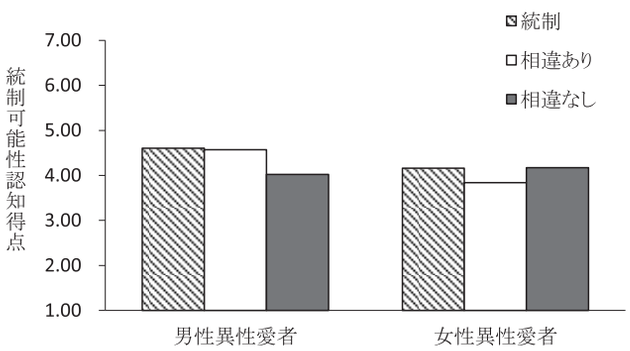

Figure 3. 統制可能性認知

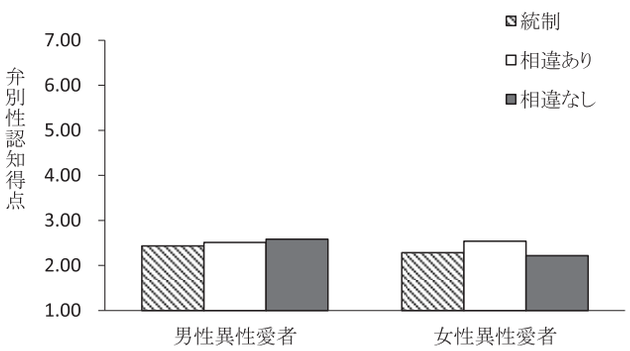

Figure 4. 弁別性認知

べて，同性愛者の性指向を生得的で統制不可能であると認識している傾向が示されたが，予測していたような男性異性愛者と女性異性愛者それぞれにおける生物学的情報による差はみられなかった。また，弁別性についても，予測していたような男性異性愛者における生物学的情報が与える影響はみられず，性別による差や生物学的情報による差なども示されなかった。したがって，予測 1 に沿った結果は得られず，生物学的情報が明示されることによって，生物学的な特徴以外の同性愛者の特徴の認識に男性異性愛者と女性異性愛者とでは異なる影響を受けるといった仮説は支持されなかった。

予測 2，3 について

上述のように生物学的情報による効果は確認されなかったが，同性愛者との弁別性を強く認識している男性異性愛者においてジェンダー自尊心とゲイに対する否定的態度の関係が弱く，また生得性や統制不可能性を強く認識している女性異性愛者においてジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対して寛容であるといった関係が強いという可能性は考えられる。そこで，男性異性愛者のゲイに対する態度，女性異性愛者のレズビアンに対する態度それぞれについて，ジェンダー自尊心および同性愛者に関する認識を示す各変数（生物学的相違，生得性，統制可能性，弁別性）を独立変数とした階層的重回帰分析を行った。各変数については平均値により中心化を行った。それぞれの変数を step1 で，ジェンダー自尊心と同性愛者に関する認識を示す各変数それぞれとの 2 要因交互作用の項を step2 で投入した。step1 から step2 への決定係数（R^2）の増分が有意または有意傾向であった場合には step2 を採用したが，決定係数（R^2）の増分が非有意であった場合には step1 を採用した。Table1 および Table2 は採用した step で投入された独立変数の標準偏回帰係数（β）を示した。

男性異性愛者のゲイに対する態度

まず，男性異性愛者のゲイに対する態度について検討を行った（Table1）。その結果，ゲイに対する心理的親しみについては，同性愛者と異性愛者の弁別性や，同性愛者の性指向の統制可能性を認識しているほど低減する傾向がみられた。また社会的容認度については，弁別性や統制可能性を認識するほど容認度が低減しており，一方で，同性愛が生得的であると認識しているほど社会的容認度が高いことが示された。ゲイに対する心理的親しみや社会的容認において，ジェンダー自尊心と同性愛者に関する各特徴認識との交互作用は認められなかった。また，同情においてはモデル自体が有意ではなかった。

同性愛者の性指向の統制可能性を高く認知しているほど心理的親しみや社会的容認といったゲイに対する寛容な態度が低減する傾向や，生得性の認知が高いほど社会的容認度が高くなるといった傾向は帰属理論による説明と整合する結果であった。なお，男性異性愛者においては，ジェンダー自尊心が高いほどゲイに対して否定的であり，同性愛者と異性愛者の弁別性の知覚の程度が高い

Table 1. ゲイに対する態度における階層的重回帰分析結果

	心理的親しみ	社会的容認	同情
	β	β	β
ジェンダー自尊心	−. 12	−. 13	. 11
生物学的相違	. 03	−. 09	. 05
弁別性	−. 42 ***	−. 28 **	−. 04
生得性	. 06	. 21 *	. 10
統制可能性	−. 28 **	−. 31 **	−. 26 *
生物学的相違×ジェンダー自尊心			
弁別性×ジェンダー自尊心			
生得性×ジェンダー自尊心			
統制可能性×ジェンダー自尊心			
調整済み R^2	. 27 ***	. 27 ***	. 03
ΔR^2（step1→step2）	. 03	. 00	. 08

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

場合にはそうした関係性が弱まるといった予測 2-1 は支持されなかった。また，態度の側面によって影響の現れ方が異なるとした予測 3 も支持されなかった。

女性異性愛者のレズビアンに対する態度

次に女性異性愛者のレズビアンに対する態度について検討を行った（Table 2）。まず，心理的親しみについては，同性愛者と異性愛者の弁別性を認識しているほど心理的親しみの程度が低いことが示された。また，有意傾向であるが，同性愛は統制可能だと認知しているほど心理的親しみの程度が低かった。さらに，統制可能性×ジェンダー自尊心の交互作用が有意であったため，統制可能性認知の高い場合（＋1SD）と低い場合（－1SD）ごとに下位検定を行った（Figure 5）。その結果，統制可能性認知が高い場合に，有意傾向ではあるがジェンダー自尊心が高いほど心理的親しみが高くなっていた（$\beta = .29$, $p < .10$）。一方で，統制可能性認知が低い場合はジェンダー自尊心の主効果は有意ではなかった（$\beta = -.11$, *ns*）。また，生物学的相違×ジェンダー自尊心の交互作用が有意傾向であったため，参考までに同様に下位検定を行った。その結果，生物学的相違認知が高い場合にジェンダー自尊心が高いほど心理的親しみを感じていることが有意傾向ながら示された（$\beta = .38$, $p < .10$）。生物学的相違認知が低い場合にジェンダー自尊心の主効果は非有意であった（$\beta = -.20$, *ns*）。

これらの結果は，ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対して寛容であるといった関係が，同性愛は本人の統制不可能な特徴であると認識している場合により顕著になるといった予測とは異なる結果であった。したがって，レズビアンが支援の必要な対象であるとみなした場合に，ジェンダー自尊心が高いほど寛容になると想定していた予測 2-2 は支持されなかった。

社会的容認については，同性愛者との弁別性を明確に認知しているほど，同性愛が統制可能であると認識しているほど否定的であり，同性愛が生得的であると認識しているほど肯定的であった。ただし，ジェンダー自尊心と同性愛者の認識に関する各変数との交互作用はみられなかった。

同情については，同性愛が生得的であると認識しているほど同情的であった。生得性×ジェンダー自尊心の交互作用が有意であったため生得性認知の高い場合（＋1SD）と低い場合（－1SD）ごとに下位検定を行った（Figure 6）。その結果，生得性認知が低い場合にはジェンダー自尊心が高いほど同情的であったのに対し

Table 2. レズビアンに対する態度における階層的重回帰分析結果

	心理的親しみ	社会的容認	同情
	β	β	β
ジェンダー自尊心	. 09	. 08	. 15
生物学的相違	−. 09	−. 21	−. 25
弁別性	−. 47 ***	−. 28 *	. 21
生得性	−. 03	. 31 *	. 26 †
統制可能性	−. 18 †	−. 20 †	−. 06
生物学的相違×ジェンダー自尊心	. 28 †		. 03
弁別性×ジェンダー自尊心	−. 16		. 01
生得性×ジェンダー自尊心	. 14		−. 36 *
統制可能性×ジェンダー自尊心	. 23 *		. 18
調整済み R^2	. 34 ***	. 20 **	. 15 *
ΔR^2（step1→step2）	. 11 *	. 09	. 13 †

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

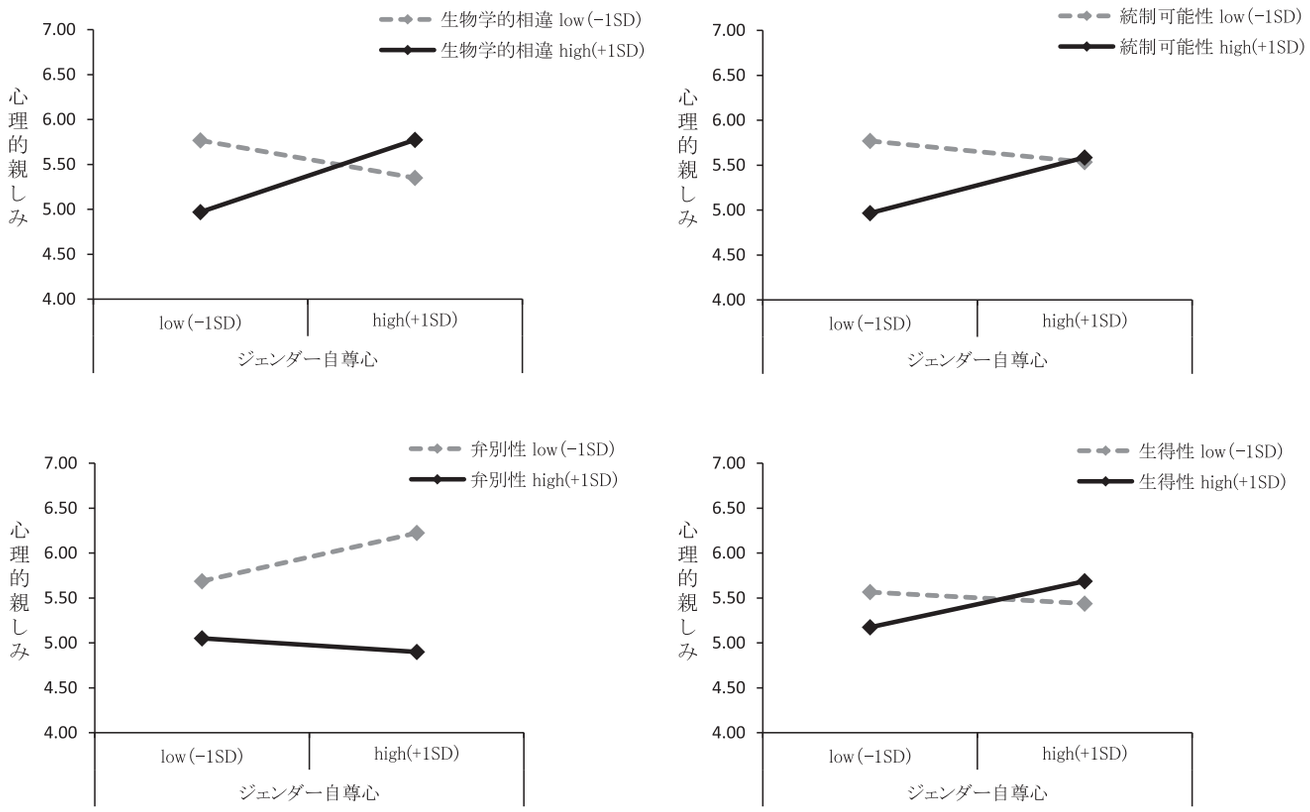

Figure 5. 女性異性愛者における各条件別のレズビアンに対する心理的親しみ

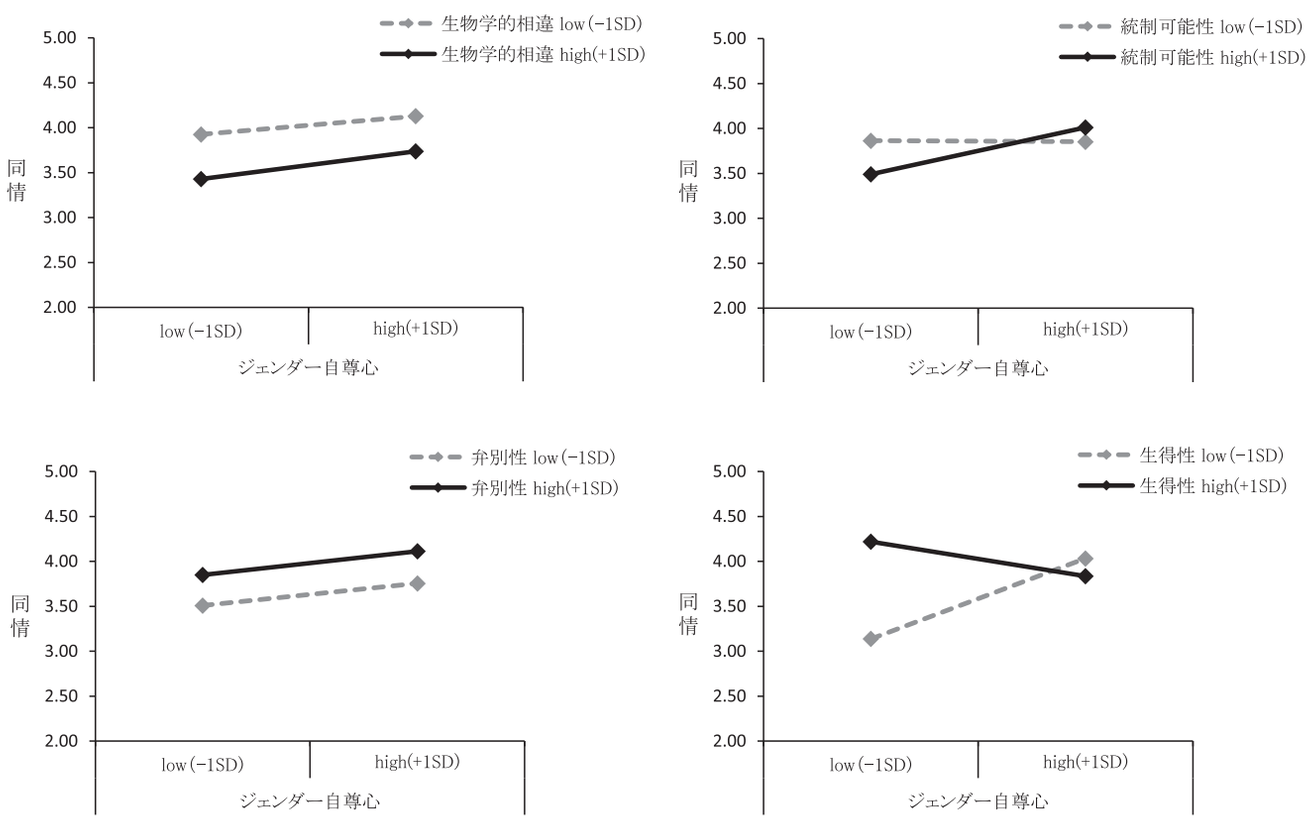

Figure 6. 女性異性愛者における各条件別のレズビアンに対する同情

（$\beta = .53$, $p < .01$），生得性知覚が高い場合はジェンダー自尊心の主効果は有意ではなかった（$\beta = -.23$, ns）。この結果についても，予測 2-2 とは異なる結果であった。

女性異性愛者において，予測とは異なっていたが，同性愛者の認識がジェンダー自尊心と態度との関連に影響を与えることを示す結果が，レズビアンに対する心理的

親しみや同情でみられた。一方，社会的容認態度においてはジェンダー自尊心との関連などはみられなかった。これより，社会状況などの要因によって，公的差別にあたるような態度表出は抑制されやすいため，社会的容認は独立変数による影響を受けにくいとした予測 3 は支持されたと考えられる。

考察

同性愛者に関する認識

本研究の 1 つ目の検討課題は，男性異性愛者と女性異性愛者では同性愛者に関する生物学的情報が同様に与えられていても異なる働きをするといった仮説を検証することであった。男性異性愛者は生物学的情報を同性愛者と異性愛者の集団間の弁別性の手がかりとし，女性異性愛者は同性愛の原因帰属の手がかりとすると予測していた。しかし本研究の結果，生物学的情報による同性愛者と異性愛者の弁別性や，同性愛者の生得性または統制可能性の認識への影響は男女いずれにおいても確認されなかった。したがって，仮説は支持されなかった。

ただし，生物学的相違に関する認識については，同性愛者と異性愛者が生物学的に異なるといった情報が与えられた相違あり条件において他の条件よりも得点が高くなっていた。この結果から，参加者はある程度実験者の意図通りに解説文を読んで情報を得ていたと考えられる。しかし，統制条件や相違なし条件の評定値をみると，そもそも同性愛者と異性愛者が生物学的に異なるといった認識は非常に低く，相違あり条件においても中点 4（どちらともいえない）を下回っていた。この点は，鈴木・池上（2015a）においても指摘されており，今回の実験に使用した解説文は，これまで生物学的な違いなどはないと思っていた参加者に対して，違いがあるのかもしれないといった迷いを与えるにとどまっていた可能性がある。

生物学的情報は，集団間の弁別性や同性愛者の性指向の生得性または統制可能性の認識にも影響は及んでいなかった。上述したように本研究で用いた生物学的情報は，同性愛者と異性愛者は生物学的に差異があるのかもしれないといった認識をもたらす程度の影響力しか持たなかったことを考えると，同性愛者に関する他の認識をも変化させるほどには影響を与え得なかったのかもしれない。ただ，本研究では生物学的情報を読んだ後に様々な項目を尋ねており，それらの項目を読んだために同性愛者に関する多様な特徴が顕現化し，実験操作文による効果が相殺された可能性も考えられる。したがって，同性愛者の生物学的情報の影響については，そのような点を考慮した検討が今後必要である。

なお，本研究では，同性愛者の特徴の認識においてそもそも性差のあることが示されており，男性異性愛者の方が女性異性愛者よりも同性愛者の性指向の統制可能性を高く認知し，生得性を低く認知していることがわかった。男性異性愛者は，同性愛者であることは本人の意志であるととらえ，それゆえ彼らは性役割規範を自ら逸脱する者として非難されるのは当然であると考えることで，自身の否定的態度を正当化しているのではないかと推察される。Herek（1993）の指摘するように，異性愛者であることを強調するために同性愛者に対して否定的態度を示すといった動機づけが男性異性愛者の方が強い可能性を考慮すると，同性愛者に対する否定的態度の正当化への動機づけが強いゆえに，女性異性愛者よりも男性異性愛者のほうが，同性愛者の統制可能性の程度を高く評価したのかもしれない。

ジェンダー自尊心と同性愛者への態度

本研究の 2 つ目の検討課題は，男性異性愛者と女性異性愛者とでは，生物学的情報によって顕現化した同性愛者に関する認識が，ジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度の間にみられる関係に与える影響が異なるという仮説を検証することであった。しかしながら，結果は予想とはかなり異なるものであった。以下に男性異性愛者と女性異性愛者ごとに考察を進める。

男性異性愛者のジェンダー自尊心とゲイに対する態度

当初，男性異性愛者はゲイに対して否定的態度をとることによって，ゲイと自分たちの差異化を図りジェンダー自尊心を維持していると想定し，それゆえ同性愛者と異性愛者の弁別性が顕現化すると，ジェンダー自尊心が同性愛者への否定的態度を促進するという関係が弱まると予測していた。だが，予測は支持されなかった。

本研究では，そもそも男性異性愛者においてジェンダー自尊心が高い者ほどゲイに対して否定的であるといった関係がみられなかった。同様の結果は，鈴木・池上（2015a）でも報告されている。その理由として，本研究や鈴木・池上（2015a）では，Falomir-Pichastor & Mugny（2009）が対象とした人たちよりも若い年齢層の大学生を対象としていること，また日本においては男性性を構成する側面として異性愛者であることの重要性が相対的に低いためではないかと考えられる。

さらに，本研究では，同性愛者との集団間の弁別性が認識されると，アイデンティティへの脅威が緩和され，ジェンダー自尊心を維持するために否定的態度をとるという傾向は弱まると考えていた。しかし，実際には男性異性愛者において，同性愛者との弁別性が高く認識されているほど，ゲイに対して心理的に距離を置き，社会的

容認度も低いという関係が認められた（Table 1 参照）。この結果については，同性愛者と異性愛者は異なる集団であるといった弁別性に関する項目が，同性愛者に対する否定的な態度を反映している内容であったからではないかと考えられる。つまり，心理的な距離を置いている対象，社会的にも権利を認めたくない対象であるから，同性愛者は自分たち異性愛者とは全く異なる集団であると答える傾向がみられたと考えられる。すなわち，弁別性の項目への回答は，生物学的に違っているという第三者からの客観的な情報によって集団間の弁別性が確保された程度を測定しているのではなく，元々持っていた否定的な態度が反映された結果であったと考えることができる。こうした可能性を考えると，弁別性について測定する項目を再度検討する必要があるだろう。

また，男性異性愛者において，同性愛は統制可能であると認識しているほど，同性愛者と心理的距離を置き，社会的容認度も低いといった関係がみられた（Table 1 参照）。これらの結果は，帰属理論による説明と整合する。ゲイであることが自身の選択や意志によると考えているほど，逸脱者に対する非難感情が促され否定的になることを示しているからである。Herek（1993）や Falomir-Pichastor & Mugny（2009）に代表される欧米の研究では，これまで男性異性愛者においてはジェンダー自尊心を維持するために否定的態度をとるといった社会的アイデンティティ理論による説明が可能であると考えられていた。しかし，異性愛者であることが男性性の重要な証ととらえる意識が希薄であると考えられる日本の男性異性愛者の場合，社会的アイデンティ理論に基づく心理機制よりも帰属理論に基づく心理機制の影響の方が優勢になるのかもしれない。

また，注目すべきは，同性愛者の性指向の生得性を認識しているほど社会的容認度が高いといった結果がみられた一方で，心理的な親しみについてはそのような関係がみられなかった点である。つまり，同性愛は生まれ持った特徴であると認識すると非難する気持ちは低減するが，個人的に親しくなるか否かはまた別の問題としてとらえていることがうかがえる。既述したように，同性愛者に対する態度における公的な差別と個人間の差別は異なることが指摘されているが，本研究の結果もそれを示しているといえる。

女性異性愛者のジェンダー自尊心とレズビアンに対する態度

女性異性愛者においては，帰属理論による説明と整合した結果が態度の側面にかかわらず認められている。すなわち，同性愛の統制可能性を認識するほど心理的親しみや社会的容認態度は低減しており，生得的であると知覚しているほど社会的容認が強く同情的である傾向が示された。

しかし，女性異性愛者のレズビアンに対する態度とジェンダー自尊心との関係については，帰属理論に基づく当初の仮説とは全く異なる結果が確認された。当初，女性異性愛者については，ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに寛容であり，統制不可能性や生得性に関する認識が顕現化すると，そうした関係性が強まると予測していた。ところが，予測とは異なり，同性愛は統制可能であるという認識の程度が高い場合にジェンダー自尊心が高いほど心理的な親しみを感じており，生得的であるという認識の程度が低い場合にジェンダー自尊心が高いほど同情的であった。このような結果は，どのように説明できるであろうか。

国土交通省（2013）の報告によると，2010 年時点で，結婚し子どもを持ちつつ仕事も続けるといった家庭と仕事の両立，または子育て後に再び仕事を持つといったライフスタイルを理想とする女性がそれぞれ回答者の 3 割以上を占め，専業主婦を理想とする女性は 2 割程度であった。「男性は仕事，女性は家庭」といった伝統的な性役割規範に従おうとする女性の割合は今後ますます減少していくであろうが，伝統的な性役割規範に従った生き方をする女性も依然として存在することも否定できない。高林・沼崎（2010）では，女性は，これまでの伝統的な性役割規範に従う女性（伝統的女性）としての自己表象と，そうした規範には従わない女性（非伝統的女性）としての自己表象の両方を内在化させているとし，ある時点でそのどちらが顕在化しているか，またはどちらの自己が慢性的に優位となっているかによって，サブカテゴリー化された女性（「キャリア女性」「家庭的女性」）に対する偏見的反応やステレオタイプ的反応が異なるという予測を立て検討を行っている。その結果，伝統的女性の自己表象が慢性的に優位となっている女性は，キャリア女性よりも家庭的女性に対して好意的であることが示されている。これらの知見に照らすと，本研究の参加者である女性異性愛者は，ジェンダー自尊心において非伝統的な女性としての自己表象が優位であったのではないかと考えられる。そのような女性異性愛者が，同性愛者の性指向は統制可能であると認識する場合，レズビアンは同じ女性でありながら自身のセクシュアリティを主体的に選び生きている非伝統的な女性のサブタイプとして認識され，ジェンダー自尊心が高いほど態度がポジティブになる可能性がある。もしそうであるなら，本研究の場合，ジェンダー自尊心の低い女性は，伝統的女性の自己表象が慢性的に強く非伝統的な女性としての自信や誇りを重要ととらえていないため，レズビアンに対してポジティブな反応を示さなかったのではないだろうか。また，同性愛が生得的であるという認識の程度が低い場合，ジェンダー自尊心が高いほど同情的であった結果につい

ても，やはり同様の解釈が可能である。依然として社会には女性に対する偏見は存在しており，そのような女性のなかでもさらに性指向においてもマイノリティとしての要素を持つレズビアンに対して，非伝統的女性としての自己表象が優位にある女性異性愛者の方が慈悲的な気持ちを傾けやすいとも考えられるからである。

ただし，本研究で測定した女性のジェンダー自尊心が，伝統的な性役割規範に従う女性としての自信や誇りに基づいていたのか，非伝統的な女性としての自信や誇りに基づいていたのか，また両方が混在していたのかはあきらかではない。そのため，女性異性愛者のジェンダー自尊心が，伝統的または非伝統的な女性像のいずれに基づくものであるのかについては今後詳細に検討する必要がある。こうした点を明確にすることで，鈴木・池上（2015a）において，生物学的に同じであると明示されると，ジェンダー自尊心と寛容な態度の関係が弱化した背景にある心的メカニズムについても明らかになるのではないだろうか。なぜなら,上述したように，女性にもサブカテゴリーが存在し，またどのような女性としての自己表象が優位となっているかには個人差があり，そのため研究によって結果にばらつきがみられる可能性が考えられるからである。

加えて，今回，生物学的情報は統制可能性や生得性の認識の程度には影響を与えなかった。また生物学的相違と統制可能性の認識との間には有意な相関関係は示されなかった（$r=-.01$, *ns*）。したがって，同性愛者が生物学的な基盤を持つことと，自身が同性愛者としての生き方を主体的に選択することは異なる次元としてとらえられている可能性もある。

結論

本研究は，男性異性愛者と女性異性愛者の同性の同性愛者に対する態度における心理機制について，これまでの議論の妥当性を確かめることを目的としていた。しかし予測していたような結果は得られず，Falomir-Pichastor & Mugny（2009）や鈴木・池上（2015a）の主張を支持するような証拠は得られなかった。男性異性愛者においては社会的アイデンティティ理論による心理機制よりも帰属理論との整合性が確認されたことから，ジェンダー自尊心維持のために否定的態度をとるという心理機制以外の要因の影響が強い可能性が考えられる。また，同性愛者の社会的容認においては，ジェンダー自尊心の維持を図る心理機制よりも昨今の社会的風潮が強く影響している可能性も考えられる。加えて，女性異性愛者においては，帰属理論が想定する心理過程とは異なり，レズビアンであることが統制可能であると認識する場合にジェンダー自尊心が肯定的な態度を促す可能性も示唆された。しかし，いずれの心理過程を想定することが妥当であるのか結論づけるには，ジェンダー自尊心の多義的な側面を整理し検討する必要がある。

したがって，本研究によって，これまで異性愛者の同性の同性愛者に対する態度において議論されてきた心理機制が直ちに棄却されるわけではなく，あくまでもその他の要因も考慮する必要のあることが示唆されたにとどまる。

本研究の限界と今後の課題

本研究においては様々な限界点があげられる。まず，本研究で取り上げた生物学的情報については，同性愛者に関する認識に対して十分な影響力は持ち合わせていないのかもしれないという点である。また，本研究で用いた同性愛者に関する認識の項目についても独自に作成したものであり，その妥当性は確認されていない。これらの項目が適切なものであったのかなど再度検討する必要がある。

最も重要な点は，上述したように本研究で仮説を支持する結果が得られなかったことが，これまでの同性愛者に対する態度の説明を直ちに否定することにはならない点である。今後は，これまでの理論では説明できない結果を説明する新たな理論を提起し，それらを統合していく必要があるだろう。

注

1．本研究の一部は，日本社会心理学会第 56 回大会，および The International School Program, Graduate School of Literature（IS 研究交流セミナー 2015 第 2 回）において発表されている。

2．本研究では女性同性愛者を「レズビアン」，男性同性愛者を「ゲイ」と表記する。

引用文献

Branscombe, N. R., Ellemers, N., Spears, R., & Doosje, B. (1999). The context and content of social identity threat. In N. Ellemers, R. Spears, & B. Doosje (Eds.), *Social identity: Context, commitment, content*. Oxford, England: Blackwell Science. pp. 35-58.

Falomir-Pichastor, J. M. & Mugny, G. (2009). "I'm not gay…. I'm a real man!": Heterosexual men's gender self-esteem and sexual prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *35*, 1233-1243.

Hebl, M. R., Foster, J. B., Mennix, L. M., & Dovidio, J. F. (2002). Formal and interpersonal discrimination: A field study of bias toward homosexual applicants. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *28*, 815-825.

Herek, G. M. (1993). On heterosexual masculinity: Some psychical consequences of the social construction of gender and sexuality. In L. D. Garnets & D. C. Kimmel (Eds.), *Psychological perspectives on lesbian and gay male experiences* (pp.

316-330). New York: Columbia University Press.
Herek, G. M. (2002). Gender gaps in public opinion about lesbians and gay men. *Public Opinion Quarterly*, *66*, 40-66.
Hoover, R. & Fishbein, H. D. (1999). The development of prejudice and sex role stereotyping in white adolescents and white young adults. *Journal of Applied Developmental Psychology*, *20*, 431-448.
国土交通省（2013）「国土交通白書 2013」http://www.mlit.go.jp/statistics/file000004.html（閲覧日：2017 年 6 月 12 日）
宮澤　仁・福富　護（2008）. 同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連　東京学芸大学紀要　総合教育科学系, *59*, 211-221.
鈴木文子・池上知子（2015a）. 異性愛者のジェンダー自尊心と同性の同性愛者に対する態度　社会心理学研究, *30*, 183-190.
鈴木文子・池上知子（2015b）. 同性愛者に対する態度の規定因に関する検討：ジェンダー自尊心と性役割規範の観点から　人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要, *66*, 67-86.
Tajfel, H. & Turner, J. C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel & W. G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations*. Chicago: Nelson-Hall. pp. 7-24.
高林久美子・沼崎　誠（2010）. 女性による伝統的女性と非伝統的女性への偏見とステレオタイプの適用：潜在レベルからの検討　社会心理学研究, *26*, 141-150.
Weiner, B., Perry, R. P., & Magnusson, J. (1988). An attributional analysis of reactions to stigmas. *Journal of Personality and Social Psychology*, *55*, 738-748.

How do Heterosexuals View Homosexuals?: From the View Point of Social Identity Theory and Attribution Theory

Ayako SUZUKI, Tomoko IKEGAMI

Previous studies demonstrated that heterosexual men express sexual prejudice against gays in order to differentiate themselves from gays and thus maintain a positive gender self-esteem. On the other hand, heterosexual women's gender self-esteem has been found to be inversely related to negative attitudes toward lesbians. Moreover, it has been found that biological information on homosexuality moderates the above linkages in a quite different manner between heterosexual men and women. Therefore, we investigated how such biological information differently influences views about homosexuals of the same gender between heterosexual men and women. Furthermore, we investigated how differently the perception formed by the biological information would moderate the relationship between heterosexuals' gender self-esteem and attitudes toward homosexuals of the same gender in both heterosexual men and women. We hypothesized that, for heterosexual men, perceived biological differences would enhance the distinctiveness between heterosexuals and homosexuals, thus mitigating the negative relationship between gender self-esteem and favorable attitudes toward gays. On the other hand, we hypothesized that for heterosexual women, the information would emphasize the perception that homosexuality has a genetic origin and is uncontrollable, thus amplifying the positive relationship between gender self-esteem and favorable attitudes toward lesbians. A questionnaire study was conducted using 175 Japanese undergraduates as respondents. Consequently, we did not obtain any evidence in support of the above hypotheses. Our results indicated that perceived biological differences or similarities did not influence the way either heterosexual men or women viewed homosexuals, in terms of intergroup distinctiveness, genetic origin and controllability. However, interestingly but unexpectedly, heterosexual women's gender self-esteem was positively related to tolerance for lesbians when the score of perceived controllability was high,

whereas such a relationship disappeared when the perceived controllability was low. In addition, when the score of perceived genetic origin was low, heterosexual women's gender self-esteem was positively related to sympathy for lesbians, whereas such a relationship disappeared when the perceived genetic origin was high. Such tendencies were not found for heterosexual men. The results suggest that there is a significant difference between heterosexual men and women in their way of viewing homosexuals and this view's relationship to gender self-esteem.

Keywords：gay, lesbian, controllability, gender self-esteem, prejudice